



同時通訳をする際のヒント^[1]

関川富士子
ベルリン日独センター語学研修部長
aiic 会議通訳者

同時通訳者を大まかに分けると、二つのタイプがあると思います。私はこれを「たれ流しタイプ」と「だし惜しみタイプ」と呼んでいるのですが、私より格段に品のよい同僚は、これを「ところてんタイプ」と「押し寿司タイプ」と呼んでいます。

私は自他ともに認める「たれ流しタイプ」です。
たとえば、つぎのような発言があったとしましょう。

Nun, meine Damen und Herren, komme ich auf mein eigentliches Thema, nämlich zur Perspektive Chinas nach dessen Beitritt in die WTO zu sprechen, wobei mir die Aussage von dem Herrn da drüben — es tut mir leid, aber ich kann von hier aus Ihren Namen nicht lesen; ich brauche wohl eine neue Brille. Vielleicht kann man ja demnächst billige Brillen aus China kaufen, natürlich mit bester Qualität — also jedenfalls, das was Sie vorhin über Korea gesagt haben, dazu muß ich auch noch einmal Stellung beziehen — eine Redewendung aus dem militärischen Bereich — denn diesen Aspekt, den militärischen Aspekt dürfen wir, meine Damen und Herren, bei China keinesfalls vernachlässigen. Also nun die Rolle Chinas nach dessen Beitritt in die WTO:

「だし惜しみタイプ」の通訳者の場合は、次のようになるのではないのでしょうか。

つぎに、私の本来のテーマ、WTO加盟後の中国の展望についてお話しします。この関連で、先ほどの韓国関連のご発言にもコメントいたします。また、中国の軍事問題にも触れます。

これを「たれ流しタイプ」の私が通訳すると、つぎのようになります。

ご列席の皆様、ここで私の本来のテーマ、すなわち中国がWTO、世界貿易機構に加盟した後の展望に入りますが、この関連で、あちらの席の方の先ほどのご発言にも触れます。ちょっと席が遠くて、発言した方のネームプレートが読めなくて申し訳ありません。新しい眼鏡を買わなくてはならないのですが、そのうち、中国製の安くて良質の眼鏡が買えるようになるかもしれませんね。それはさておいて、先ほどの韓国に関するご

1. ベルリン日独センター主宰の「日独通訳勉強会」での講義用に準備した原稿（2006年3月1日）

発言にも触れます。つまり、私なりに、軍事用語で言うところの「布陣を敷いて」意見をまとめたい、ということです。ここで軍事用語をもちだしたのは、中国の軍事面にも目を向けなければならないと考えるからです。では、ここからWTO加盟後の中国の展望です。

いずれの例も少し誇張気味ではありますが、二つのタイプの違いがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

どちらのタイプが良いとか悪いとかいうことはありません。重要なのは、自分がどちらのタイプなのかを早く見極めることです。一番いけないのはどっちつかずになってしまうことです。

それでは、ご列席の皆様、ここで私の本来のテーマ、すなわち中国の展望、WTO、世界貿易機構に加盟した後の展望に入りますが、あちらの席の方の先ほどのご発言、申し訳ありませんが、ここからですと名前が読めなくて、新しい眼鏡が必要で、そのうち安い眼鏡をですね、もちろん良質のをですね、つまり韓国ですけれども、陣地に着いてですね、諺ですけれど、その側面が、ご列席の皆様、中国を忘れてはいけません。つまり、中国がWTOに加盟した後ですけれども。

以上の例も誇張ですが、「たれ流し」で始め、複文の頭だけ拾っていて全体がみえなくなり、失敗する例です。

「たれ流し」場合は耳から入ってくる文章をほぼ同時進行で訳出するため、話し手が話すであろう内容を先取りし、一度口からだしてしまっただけで二文末までもってゆかなければなりません。しかも、先取りの内容が間違っていたら軌道を修正しつつ文末までもってゆくのです。話者の文章が完結していなくとも、訳出では完結させねばなりませんし、本筋から外れる箇所はトーンを落とすことによって、それを聴衆に伝える努力もしなければなりません。「たれ流しタイプ」では先取りの能力、語学力（構文力）、パフォーマンスがキーとなります。

それでは「だし惜しみ」、つまり総括するほうが簡単かということ、そうではありません。聞いた内容を訳者自身が理解して始めて「総括」できるので、分かるまでずっと我慢しなければなりませんし、それだけ一時的に記憶に溜めておく量も増えます。訳出し始めた後も訳出しながらつぎの総括部分を頭のなかに蓄えてゆかねばなりません。「だし惜しみタイプ」では内容を理解する能力と相当な通訳技術が必要です。

通訳者に二つのタイプがあるように、聞く側にも「たれ流し」を好むタイプと「だし惜しみ・総括」を好むタイプがいるようです。同時通訳つきの国際会議に馴れている聴衆は「総括タイプ」を好む、という調査を読んだことがあります。「総括タイプ」の通訳者はメッセージを凝縮して訳出するので、聞いている人はメモを取るのも楽でしょう。

しかし、「総括タイプ」が嫌われる例もあります。少し古い例ですが、えひめ丸が緊急浮上訓練中の米潜水艦にぶつけられ、沈没した事件を覚えておられる方もいらっしゃるでしょう。その後、ハワイで査問会議が開かれたことを報道した2001年3月7日の朝日新聞の記事です。

五日に始まった査問会議は、ホノルル入りしている行方不明者の家族六人が傍聴したが、難解な専門用語が飛び交うやりとり言葉の壁を感じる人もいた。

行方不明者の家族も含む日本関係者の傍聴席は九席で、イヤホンで日本語に同時通訳された。査問会議招集を決めたファーゴ太平洋艦隊司令官の「日米両国民に完全に

オープンな説明責任を果たす」という姿勢の表れだった。

しかし家族は時々、聞き取りにくそうにイヤホンに手を当てた。通訳の間が不自然に空いたりすると、傍聴席の横にある通訳者のブースを心配そうに見やる人もいた。「日本語訳も分かりにくい。法廷で話す人の声が小さすぎて、通訳が聞き取れないらしい」などともどかしさを募らせた。^[2]

「間が不自然に空く」のは「声が聞き取れない」からではなく、総括する内容がまとまるまで待っているからだと思います。これを知らない聴衆は、当然不安を感じるでしょう。

私の経験上、全日（6時間程度）の会議で「総括タイプ」で訳出すると、時間とともに聴衆も通訳者のタイプに慣れ、安心して聞いてくれるようになります。つまり、「この通訳者は訳出する量は少ないが、重要なメッセージは全部入っているようだし、非常に簡潔な訳文で聞きやすい」と思ってくださいます。このタイプは、とくに日本の方に多いようです。しかし、これが1時間や2時間の会議では、信頼される前に終わってしまうので「総括タイプ」は損かもしれません。上述の査問会議の場合、まさにそのような例だったのではないのでしょうか。

では「たれ流しタイプ」ではどうでしょう。私の通訳を聞いてくれた母は「貴方の通訳は早口すぎて聞きづらい」と言っておりました。「たれ流し」場合、話者が完結させなかった文も訳出では完結させ、先取りが間違っていたら修正し、どうしても話者より話す量が多くなってしまいがちで、自ずと早口になってしまうのです。大正生まれの母にはさぞかし聞きづらいことでしょう。

反対に「貴方の通訳は雰囲気も伝わってきて良かった」と言ってください方もいて、そういう時は通訳冥利につきます。私の経験では、ドイツの方のほうが日本の方より「たれ流し」を好まれるようです。

最終的に、ところてんを好きな人もいれば押し寿司を好きな人もいるように、通訳する側にも聞く側にも二つのタイプがある、という結論に達し、通訳者に対しては

1. 自分が「ところてんタイプ」なのか「押し寿司タイプ」なのか早めに見極めること。

と助言させていただきます。ともかく、どっちつかずは失敗のもとです。これが、同時通訳上達の秘訣として私が一番に皆様にお伝えしたいことです。もちろん、両方のタイプを上手に使い分けることができればベストなのですが、これは無理な注文でしょう。

そのほかに気づいた同時通訳のちょっとしたコツを幾つか挙げましょう。

2. 小手先の技に走るのは止めましょう。「ご列席の皆様」のような合いの手を訳出するといかにもプロのように聞こえて気持ちが良いかもしれませんが、そのために話者のつぎのメッセージを聞き落としているようでは本末転倒です。

3. ジョークを訳出している通訳者が笑っているのを何回かみましたが、これもいけません。話者だって自分で笑いながらジョークを飛ばしているわけではありません。通訳者は笑ってみせることで、自分がジョークを理解したことをアピールしたいのかもしれませんが、通訳に頼っている聞き手に

2.【同時通訳でも言葉の壁高く、ホノルル5日、井田香奈子、小倉いづみ】（朝日新聞、2001年3月7日）

朝日新聞社知的財産センターより2006年8月1日から1年間、本記事を利用する承諾を得た。本記事を朝日新聞社に無断で転載する事は、同社より禁止されている。

してみれば、笑いながら通訳されても聞きづらいただけです。ましてや笑っているだけで通訳しないまま終らせてしまうのは言語道断です。

4. 聞きやすい通訳と、読みやすい翻訳に共通するのは、接続詞の使い方ではないでしょうか。たとえオリジナルに入っていないくとも、適切に接続詞を入れることで、全体のパフォーマンスが飛躍的に良くなります。
5. ベーシック中のベーシックですが、日本語でもドイツ語でも、母音はきちんと発音すること。とくに日本語は開口音の言語ですから、唇の動きが大切です。どんなに素晴らしい通訳でも、もごもごむにやむにやと発音されては分かる筈のものも分かりません。滑舌には常に気をつけましょう。とくに逐次通訳の場合は、マイクに自分の声に乗っているかどうか、常に自分でチェックしましょう。
6. 文章を「それは」等で始めるのは辞めましょう。例えばドイツ語で話者が「Dies」と言う場合、それはドイツ語の構文上、前の文章と繋がっているので「Dies」で受けても聞き手にスムーズに伝わります。しかし、ドイツ語を日本語に置き換えた段階で構文上の繋がりが消えてしまうことが多々あります。それでもドイツ語話者が「Dies」と言ったから日本語を「それは」で始めてしまうと、日本語の聞き手は困惑してしまいます。同様に、日本語話者が「それは」と言ったからといって、ドイツ語の文章を必ずしも「Dies」で始めなくても良いのです。私たちが伝えたいのはメッセージ（内容）であって、言葉（単語）ではありません。

皆様の、ますますのご健闘を祈ります。